

一

次の各問いに答えなさい。

問一 次の各文の——線部のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。

- 1 勉強の必要性をツウカンする。
- 2 ケーキをキントウに切り分ける。
- 3 新ルールの導入をケントウする。
- 4 日本列島を自転車でジユウダンする。
- 5 大会で新記録を樹立する。
- 6 祖父の誕生日を盛大に祝う。
- 7 世界中にある秘境の地を探検する。
- 8 突然態度が変わったので困惑する。

問二 次の四字熟語の①～④に入る漢字一字を答えなさい。また、後の①～④の意味を表す四字熟語をア～クの中からそれぞれ選んで記号で答えなさい。



- 1 死にかけているもの、ほろびかけているものを生き返らせて再び良い状態にたちなおさせること。
- 2 はばひろく、ぼうだいな量の本を読み、豊かな知識を持っていくこと。
- 3 心にかたよりや隠かくしだてがなく、正しいこと。
- 4 細かい違いはあるものの、似たりよったりであること。

二 次の文章を読んで、あとの問に答えなさい。

A マシユマロ実験が行われた後、およそ一〇年過ぎるごとに、当時実験に参加した子どもたちを追跡し、新たな調査が実施されました。「一〇年ひと昔」といわれますが、実験に参加した子どもたちは、どのよう^Bに変わっていたのでしょうか？

実験当時、保育園に通っていた子どもが、一〇年後には中学校に通う年になっているわけですので、風貌はたいそう変わっていたことでしょう。

I、四歳の時に見られた我慢強さは、何十年経っても変わっていませんでした。では、追跡調査について詳しくみていきましょう。

マシユマロ実験が行われてから約一〇年後に行われた追跡調査では、実験に参加した子どもたちの親にアンケート用紙（質問票）を送り、さまざまな質問に対して、自分の子どもがまわりの子どもと比べてどうかを回答してもらいました。

II、「お友達とうまくやっていますか？」、「嫌なことがあっても我慢できますか？」、「集中して勉強に取り組みますか？」といった質問が尋られました。

また、子どもたちの学校の教師にもアンケート用紙を送り、同じくさまざまな質問に答えてもらいました。

そして、一〇年後に実験者が部屋に戻ってくるまでマシユマロを食べずに我慢した子どもたちと、マシユマロを食べるのを我慢できなかった子どもたちを、さまざまな側面から比較したのです。

III、一〇年前にマシユマロを食べなかった我慢強い子どもたちのほうが、欲求不満を覚えるような状況では我慢強いと、まわり（親や教師）から評価されていました。彼ら彼女らは、誘惑に負けにくく、集中力が必要な課題では気が散りにくく、ストレスにさらされても、混乱して慌てたりすることもなく、上手にタイシヨ^①するスキルが高いと評価されました。また、彼ら彼女らは、先のことを考えて計画し、目標を追求するのが上手だったそうです。

子どもたちの実際の学業成績をみるために、大学進学適性検査（SAT…アメリカの子どもが大学へ入学を志願するために受ける試験）を調査した結果、一〇年前にマシユマロを食べなかった我慢強い子どもたちのほうが、SATの点数がはるかに高いこともわかりました。

さらに約一〇年後（マシユマロ実験からは約二〇年後）の追跡調査では、子どもたち（約二〇年後の調査では、子どもたちは二五〜三〇歳になっていましたので、「子ども」という表現は違和感があるかもしれませんが）自身に、さまざまな質問に回答してもらいました。その結果、マシユマロを食べなかった我慢強い子どもたちは、約二〇年後、長期目標を追求するのが上手で、高い教育水準に達し、肥満指数が大幅に低いなど、多種多様な側面

において、高いパフォーマンスを収めることがわかりました。

さらに二〇年後（マシユマロ実験からは四〇年後）の追跡調査では、彼ら彼女らの健康状態や収入、持ち家率、離婚率、前科をもつ割合が調べられました。その結果、さきほどのパフォーマンスが高い傾向は生涯ずっと継続していることがわかったのです。

D これらの結果から、子どもの頃の我慢強さが、将来にさまざまな影響を与えることがわかりました。これはとてもすごい発見です。

この実験を行った心理学者は、知能指数（IQ）の高さよりも我慢強さのほうが、将来のさまざまなパフォーマンスに大きく影響すると結論づけています。言い方を換えれば、我慢強い子どもは、将来成功する確率が高いといえるでしょう。

（中略）

この実験の対象者の偏りに着目した別の心理学者が、実験の対象を九〇人以上に増やして、同じような実験を行いました。スタンフォード大学の実験とは異なり、実験の対象となる四歳の子どものサンプルは、人種、民族性、親の学歴といった点において、アメリカ国民全体をハンエイした③ものになっていたそうです。

スタンフォード大学で行われた実験と同様に、四歳の子ども（ただし、人種、民族性、親の学歴が多種多様）を対象に、目の前にあるマシユマロを食べずに我慢できるかどうかを観察し、今度は、一一年後（子どもたちは一五歳になっていました）、子どもたちのパフォーマンス（成績）などを調査してみました。

その結果、スタンフォード大学で行われた実験結果は、再現されませんでした。この研究は二〇一八年に論文として発表され、この論文によってマシユマロ実験の結果は、経済的にも社会的にも恵まれた家庭に育った子どもに限られる、ということがわかりました。

さらに、この実験では、貧しい家庭の子どもは、裕福な家庭の子どもに比べて将来の見通しが立たないため、二個目のマシユマロを得るために我慢することはないという結果を明らかにしています。

（中略）

先の研究より、マシユマロ実験の結果は限定的であることがわかりましたが、スタンフォード大学のように、親がある程度の経済力をもっている子どもにおいては、その頃の我慢強さが、将来にさまざまな影響を与えるということは、事実です。

F では、なぜ、四歳の時にマシユマロを食べずに我慢した子どもは、将来、成功する可能性が高いのでしょうか？

私はこう考えています。ある誘惑（この実験では、目の前にあるマシユマロ）に勝てるということは、さまざまな誘惑にも打ち勝てる。そして、誘惑に打ち勝てる我慢強さは、人生の成功を決めるうえで重要なものであるのです。

（外山美樹『勉強する気はなぜ起こらないのか』による）

問一 部①～③のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。

問二 空欄 I Ⅲ に入る語句として最も適切なものを次のア～エから一つ選んで記号で答えなさい。

- ア つまり イ その結果 ウ しかし エ たとえば

問三 部A「マシユマロ実験」とは具体的にどのような人を対象とした、どのような実験であったと考えられますか、説明しなさい。スタンフォード大学で行われた実験と、その後に行われた実験に共通する内容で答えなさい。ただし、解答には次の語句を必ず使いなさい。

マシユマロ 実験者

問四 — 部B「どのように変わっていたのでしょうか？」という問いに対しての答えとなる部分を文中から三十一字でぬき出して答えなさい。

問五 — 部C「マシユマロを食べる」とありますが、人が物を食べたときに通る消化管の順として正しいものを次のア～エから一つ選んで記号で答えなさい。
えなさい。

- ア ロ ↓ 胃 ↓ 食道 ↓ 小腸 ↓ 大腸 ↓ こう門
- イ ロ ↓ 食道 ↓ 小腸 ↓ 胃 ↓ 大腸 ↓ こう門
- ウ ロ ↓ 大腸 ↓ 小腸 ↓ 胃 ↓ 食道 ↓ こう門
- エ ロ ↓ 食道 ↓ 胃 ↓ 小腸 ↓ 大腸 ↓ こう門

問六 — 部D「これらの結果」とありますが、その結果として適当でないものを、次のア～エから一つ選んで記号で答えなさい。

- ア マシユマロ実験から約二〇年後の調査では、マシユマロを食べなかった子どもたちは、高い教育水準に達している者が多かった。
- イ マシユマロ実験から約二〇年後の調査では、マシユマロを食べてしまった子どもたちの全員が、太ってしまっていた。
- ウ マシユマロ実験から約四〇年後の調査では、マシユマロを食べなかった子どもたちの多くは、健康状態が良かった。
- エ マシユマロ実験から約四〇年後の調査では、マシユマロを食べなかった子どもたちは、離婚率が低かった。

問七 — 部E「我慢強い子どもは、将来成功する確率が高い」とありますが、この結論は全ての子どもに当てはまるわけではないということが、この後の文章で述べられています。では、この結論が当てはまるのは、どういった子どもですか、文中より二十三字でぬき出して答えなさい。

問八 — 部F「なぜ、四歳の時にマシユマロを食べずに我慢した子どもは、将来、成功する可能性が高いのでしょうか？」という問いに対して、本文の内容に則して、また解答欄らんに合うように答えなさい。

三

次の文章は森絵都「むすびめ」の一節である。私（飯田）は小学校六年の時に、担任の真梨江先生の発案でテレビ番組の企画であった三十人三十一脚という競技にクラスで挑戦した。しかし、運動神経のよくない私は練習の時から皆の足を引っ張り、本番では私の転倒によってクラスが予選で敗退してしまった。十五年たった今でも私はこの経験を引きずっていた。特に、練習ではいつも足手まといだった私を助けてくれていた観音様のおだやかで優しい奥山くんが、本番での転倒の時には手を差し出してくれず、その後も私を避けるような態度だったことがずっと心にひっかかっていた。私は卒業後初めて同窓会に出席し、奥山くんに話しかけた。以下はそれに続く文章です。これを読んで後の問いに答えなさい。

店の窓明かりを離れて街灯のもとへ立つと、見あげるほどに背が伸びた奥山くんの横で、私は胸の鼓動と格闘した。安っぽくべたついた焼きとりの匂いが夜風に乗って鼻先をかすめていく。

「六年生のとき……」

軽く、軽く、軽く。私の重石を奥山くんになすりつけないように。

「転んじゃって、ごめんね」

笑って言えた。笑わなきゃ言えなかった。

「あのころ奥山くん、いつもすごく優しく、練習でもいつも助けてくれて、なのに肝心の本番で私、転んじゃって、そのせいで奥山くん**にまで迷惑**かけちゃって……。ありがとも、ごめんねも言えないままだったこと、ずっと気になってたの。もう昔のことだし、奥山くんは忘れてるかもしれないけど、私は忘れられなくて。だから、今日はそのことちゃんと話して、それで、終わりにしたかったの」

つかえながらもどうにか言いきった。直後、奥山くんの目が混乱の火花を散らしているのを見て、どきとした。

「あ、あの、ほんとにごめんね、今さら。聞いてくれてありがとう。じゃ……」

言うだけ言って逃げようとした私を制するように、そのとき、奥山くんがぬっと掌を突きだし、張りつめた声を響かせた。

「触って」

「え」

「触ってみて」

血色のいい大きな掌。触って？意味がわからず瞳で問うも、奥山くんは一字に結んだ口を動かさない。B
「私はいくりと息を呑み、震える手をさしのべた。人差し指と中指、二本の指先でそっと眼下の掌に触れる。ぬめりとした。」

「濡れてるでしょ」

「はい？」

「汗っかきなんだ」

「え」

「とくに、緊張すると大量に汗が出て」

「あ……」

「今ならぶつうに言えるけど、子どものころはすっごく、それが恥ずかしくて、だれにも知られたくなくて、声をなくした私の前で、あいかわらず白い奥山くんの首筋がみるみる赤く染まっていく。」

「あの日……あの予選の日も、ぼくの手、汗でびっしょりだった。気がつかなかった？」

問われて、ハツと息をつめた。①
あの日、スタートラインで肩と肩を組みあわせたときの、奥山くんの掌。その感触？思いだせない。首を横にふつた。

「そんな余裕なくて」

「すごい汗だったんだ、緊張して、あのムードにやられちゃって。紐を結ぶときも、腕を組むときも、どんどん汗が出てくるからすっごく焦って。飯田さんが転んだとき、あれが絶頂だった。ぼくのせいだ、ぼくが汗ばっか気にしてたからだってパニックって、ますます手がびしょびしょになって……」

ごめん、と奥山くんが悲痛な声とともに低頭する。②
C
「その濡れた手を、どうしても、飯田さんに、さしだせなかった」

「……」

時間が止まった。時がもどった。十五年前のあの日、地べたに転がる私を無表情に見下ろしていた奥山くん、どうして気づいただろう。そのこぶしが大量の汗を抱いていたなんて。いつも冷静で、おだやかで、大人びていたあの男の子が、D
D
「それほどの重圧に震えていたなんて。」

子どもだったんだ。ふいに、そのあたりまえの事実がすとんと胸に落ちた。奥山くんも、私も、もしかしたら真梨江先生も、あのころはみんなまだ本当に子どもだったんだ――。

「あれからばく、飯田さんの顔、とてもじゃないけどまともに見られなくて、謝る勇氣もないまま卒業しちゃって、それが、なんというか、ずっとこのへんに引っかかって……」

このへん、と奥山くんのこぶしが鳩尾のあたりを叩いた瞬間、はじかれたように私の涙腺がゆるみ、彼の背後に浮かぶ上弦の月がぼやけた。だから今日、飯田さんと話ができよかった。ほんとによかった」

「奥山くん……」

*「SPやっていると、どうしてもあの日のことを思いだすんだ。どんな要人守っても、セレブ守っても、クラスメイトの女子一人守れなかったら、ただのポンコツだって」

十五年間、私とおなじ重さを負ってきた元パートナー。その肩からようやく力がぬけて、なつかしい観音の笑みもどった。

私も――。目の縁ぎりぎりに涙を押し留めながら、私は声にならない声を返した。私もずっとあの日に捕らわれつづけてきた。ことあるごとに自ら傷口をえぐり、そして、弱気になっていた。どうせまた私は失敗する。自分のせいでみんなに迷惑をかける。悪いほうへ悪いほうへと考えては怖じけてしりごみし、心の弱さをぜんぶあの転倒のせいにして、結局のところ、臆病な自分を甘やかしつつづけていた。

「私も、今日、ここにきてよかった。奥山くんと話ができ、本当に……」

ほどけていく。自らの手でこじらせていた紐のむすびめが解けていく。

「ありがとう」

地を踏む足の軽さにふらつきながらも、初めて自分から奥山くんに手をさしのべた。

「こちらこそ、ありがとう」

再びつなぎあわせた手。それだけで十分だった。ためらいなく握手をしてくれた彼の濡れた掌に、十五年前の真実が宿っている。

*SP セキュリティポリスの略語。要人警護の任務にあたる警察官。奥山くんは現在SPの職についている。

問一 —— 線部①～③の本文中における意味として適切なものを、あとのア～エの中からそれぞれ一つ選んで記号で答えなさい。

① 息をつめた

ア 息をするのを我慢した

イ 口の中の唾を飲み込んだ

ウ 声を出さずにそっとした

エ 驚きで息をとめた

② 低頭する

ア 気持ちが落ち込んでうなだれる

イ 謝罪のために頭を下げる

ウ 相手をうかがうように下から見上げる

エ 力が入らなくなりしやがみ込む

③ すとんと胸に落ちた

ア 判明して驚いた

イ わかって落ちこんだ

ウ 理解できて納得した

エ 忘れていたが思いだした

問二 —— 部A「笑わなきや言えなかつた」とありますが、この時の私の気持ちとして最も適切なものを次のア～エから一つ選んで記号で答えなさい。

ア 本当はずっと気にしていたことだが、その気持ちがあまりにも大きすぎるため、笑わないと深刻過ぎる雰囲気になってしまふ。

イ 本当は過去のことと腹立たしい気持ちがあったが、その気持ちが強すぎて笑わないと怒った口調になってしまふ。

ウ 本当は今でも恥ずかしくて口に出したくなかつたが、その気持ちを気づかれないようにわざと笑いながら言った。

エ 本当はもっと早く話をしたかつたが、それがなかなかできなかつたので、やっと話ができて思わず笑顔になってしまふ。

問三 — 部B「どうやらそのままの意味らしい」とありますが、「そのままの意味」とはどういう意味ですか、答えなさい。

問四 — 部C「その濡れた手を、どうしても、飯田さんに、さしだせなかった」とありますが、それはなぜだと考えられますか。次のア〜エの中から適当でないものを一つ選んで記号で答えなさい。

- ア 本番の緊張の中、ムードにやられてしまい、飯田さんが転んだことによってパニックになってしまったから。
- イ 汗っかきで、緊張すると大量に汗をかいてしまう体質であったが、そのことに気づけなくなかったから。
- ウ 掌に大量に汗をかいてしまい、その汗がすべったことによって飯田さんが転んでしまい責任を感じたから。
- エ 大量の汗が出てくることに焦って、汗を気にしすぎて飯田さんのサポートができずに転んだと思ったから。

問五 — 部D「それほどの重圧に震えていたなんて」のあとには、倒置法により本来の語順であれば入るはずの語句がぬけています。そのぬけている語句を十一字で答えなさい。

問六 本文中の「にまで」と同じ用法の「にまで」を使って短文を作りなさい。ただし、解答には主語と述語を必ず使いなさい。また、本文の語句や文を利用しただけの解答は不正解とします。

